

# 事業成果報告書

1. 教育委員会名 : 安八町教育委員会
2. 研究主題 : [調査研究Ⅱ] 小規模校を存続させる場合の教育活動の高度化
3. 研究タイトル : 小規模校の特色を生かし一人一人に自らの考えを豊かに伝え合う力を育成するカリキュラムと指導法の開発  
～図書館教育と関わらせた国語科指導～
4. 研究課題
- (1) 小規模校のメリットを最大化させる方策
    - ア. 少人数であることを最大限に生かした教育活動に関する研究 (研究課題)
      - ・主体的な読書活動に発展させる「読むこと」の単元指導計画の工夫
      - ・仲間との学び合い活動を核とした指導援助の工夫
  - (2) 小規模校のデメリットを最小化させる方策
    - ア. 学校間ネットワークの構築 (研究課題)
      - ・他県の小規模校(福井市立越廼小学校)との交流活動の工夫
    - イ. 社会教育と密接に連携した学校教育活動 (研究課題)
      - ・P T Aとの連携
      - ・地域(長寿会、おやじの会、区長会、特別養護老人ホームあすわ苑)との連携
      - ・ハートピア安八との連携

## 5. 事業の実績

### (1) 調査研究のねらい

・本牧地区は、揖斐川沿いの輪中地帯で畑作農業地域が多く、新しい住宅が建つことは少ないため、人口も減少しつつあるが、地域の住民は、「地域の学校」としての意識が強い。

・1988年に東海三県学校図書館奨励賞、1992年に東海三県学校図書館奨励賞「総合優秀賞」(文部大臣賞)を受賞して以来、特色ある伝統的な活動として推進してきた。

・どの学年も10～24人の少人数で、固定的な人間関係の中で学校生活を送っているため、自分の考えをしっかりともち、はっきりと伝える表現力が乏しい。また、切磋琢磨して高め合う機会が少なく、学習意欲が低く、確かな学力が十分に付いていない学年もある。

・図書館教育の充実、基礎基本の確実な定着、地域の学校支援ボランティアの活用を本校の特色ある学校づくりの推進事業として取り組んでいるが、それらの活動の関連が弱く、子どもたちに確かな力を付けたり、豊かな心を育んだりするために、有効に働いているとは言えない。小規模校、少人数の学校の利点を最大限に生かし、活動をどのように関わらせたり、さらにどのような指導を付け加えたりしていけば、一人一人に自らの考えを豊かに伝え合う力を育成することができるかを明らかにする。

### (2) 調査研究の実施状況(平成27年度)

10月	<ul style="list-style-type: none"><li>・ICT機器の有効活用研修会(電子黒板、デジタル教科書)</li><li>・先進校の視察(養老町立笠郷小学校)</li><li>・先進校の視察(白川町立白川小学校)</li><li>・有識者による講演会「図書館教育と関わらせた国語科指導について」</li><li>・「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」</li><li>・「家庭学習のすすめ」取組週間 B問題対応の活用問題を朝学習で行う。</li><li>・P T Aの読み聞かせ 親子読書の奨励</li></ul>
-----	--

11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有識者による講演会「少子化事業に関わって研究の進め方について</li> <li>・5年生全校研究授業、研究会</li> <li>・第1回推進会議（研究授業参観）11/20</li> <li>・「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」</li> <li>・「家庭学習のすすめ」取組週間 B問題対応の活用問題を朝学習で行う。</li> <li>・読書月間パートII</li> <li>・サツマイモの収穫、おにまん作り（縦割り班活動）、感謝の手紙と共に配布</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力確認テスト（A問題、B問題対応）の実施</li> <li>・1年生全校研究授業、研究会</li> <li>・第2回推進会議（研究授業参観）12/14</li> <li>・「家庭学習のすすめ」取組週間 B問題対応の活用問題を朝学習として行う。</li> <li>・漢字・計算検定</li> <li>・多読賞表彰、話し方・聴き方名人表彰</li> <li>・2学期の学習指導についての自己評価実施と分析 「牧小学校の授業これだけは！」「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」「家庭学習のすすめ」「漢字・計算検定」の見直し</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福井市立越廼小学校の研究会視察1/25、26</li> <li>・「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」</li> <li>・「家庭学習のすすめ」取組週間 B問題対応の活用問題を朝学習として行う。</li> <li>・わくわく発表会</li> <li>・岐阜県学力テストの実施</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年生全校研究授業、研究会</li> <li>・「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」</li> <li>・「家庭学習のすすめ」取組週間 B問題対応の活用問題を朝学習として行う。</li> <li>・地域の方に教えていただき、麦踏み体験</li> <li>・学力確認テスト（A問題、B問題対応）の実施</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「家庭学習のすすめ」取組週間</li> <li>・「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」</li> <li>・漢字・計算検定</li> <li>・多読賞表彰、話し方・聴き方名人表彰</li> <li>・6年生を送る会</li> <li>・第3回推進会議（6年生を送る会参観）3/4（終了14日）</li> </ul>

## 6. 事業の成果

### (1) 研究課題に応じて設定した具体的目標に対する達成状況

・単元を通して、並行読書を位置付けながら、各学年の発達段階に応じて系統的な言語活動を工夫し、自ら読み取ったことを豊かに伝えようとする子を育成することを目指す。  
 ・登場人物の性格や気持ちの分かる言葉や文を見つける活動を学年ごとに系統立てて工夫して指導し、授業の出口でそのねらいを達成できたか一人一人の力を見届け、達成できていない子を把握し個に応じた指導をすることで、読みの力を高めることを目指す。  
 ○文学的文章の「読むこと」で単元を通して並行読書を位置付けながら、毎時間単元を貫く系統的な言語活動を各学年が行ってきた。単元の初めに「お話の心に残った所を紹介するために、お話宝箱を作ろう」等、単元を貫く課題（単元の出口で目指す目標）を子どもに示し、それに向けた目的的な読みを行うことで、子どもは主体的、意欲的に読むことができた。第3次では、魅力カードやお話宝箱等で、並行読書で読んできた本について読み取ったことを紹介し、単元で付けた力（指導事項）を付けることができた。教材文と並行して自分の選んだ本を読んでいくこと（並行読書）で、より物語の主題について深く考えたり、多くの本に親しむ機会が増えて読書が広がったりして、自分の読み取ったことを豊かに伝えようとする主題に迫ることができた。

○児童の達成状況の見届けとその記録のために個人カルテを作成した。できるだけ授業時間内に記録できるよう、その時間に付けたい評価規準を指導事項から明確化し、それについて◎○△等の記号で記録していけるようにした。また、それをもとに、次時つまずきの予想できる子については、どんな指導・援助をするか具体的に書き出し、授業に臨むようにした。これにより、担任は一人一人の達成状況を確認しながら、つまずきが予想できる児童を中心に指導に当たることができた。個人カルテの様式は各担任が工夫し取り組んだが、授業時間内に机間指導をしながら記録できるものでないと、普段の授業に生かしていきにくいことから、机列表に評価規準を明記したものにするとよいことを確認した。

○電子黒板、デジタル教科書を活用して、授業に臨んだ結果、大画面で見つけた言葉や文を子ども自らが指し示し、発表することができると共に、それを全員で確認し合うことができるので、たいへん有効であった。大切な言葉や文に着目し、それを交流しながら読み取る国語科の授業には、必要な機器と言える。特に、聴覚のみの情報収集が苦手な子にとって、聴覚+視覚的な情報収集が可能な電子黒板は、UDの指導としても、有効であった。

●「読むこと」の力が付いたかを学期末テストや学力確認テスト等で把握しようとした。学期末テストでは、ほとんどの学年で2学期末に点数が向上したが、テスト範囲が広く、長文を読まなければならない学力確認テストのB問題では、46～62%の達成率で成果を検証することができなかった。

・「牧小の授業、これだけは!」、「話し方・聴き方の月目標達成に向けての系統的指導」、「家庭学習のすすめ」、「漢字・計算週間」等を指導改善サイクルを通して、全校全職員が共通理解のもと指導しきることで、学び方や確かな学力を身に付けさせることを目指す。(学力確認テスト、学期末テスト、漢字・計算検定、全国学力・学習状況調査質問紙抜粋アンケート)

○「牧小の授業、これだけは!」について10月以降は、毎月月末に、担任教師が自己評価を行った。導入での課題設定については、次第に向上し、90%を越える達成率となった。どの学級でも毎時間黒板に青で囲んだ課題が明示され、課題追究型授業が行われるようになった。

○話し方・聴き方についての系統的指導を毎月の学習目標とし、指導の継続を行ってきた。毎月、重点取組期間を設け、一人一人の児童が自己評価しながら、話し方、聴き方を高めようとして取り組んだ。特に2学期は、前の発表者につなげて「○○さんにつけたしで・・・」「○○さんと違って・・・」という話し方、また、友達の発表後に「同じです。」「分かりました。」等、ハンドサインで反応する聴き方がかなり定着してきた。

○学期末に行った漢字検定であるが、どの学年もその学期に学習した50問程度のテストを実施した。どの学年も平均点が80点以上であり、内4学年は90点を上回っているため、高い得点をとることができている。これは、このテスト前に「家庭学習のすすめ」の重点週間が位置付いており、子どもたちの中に「何とんでも、一度で合格したい!」という思いが強く、前もって家庭でもくり返し練習をしている成果である。

●「牧小の授業、これだけは!」の終末のまとめやふり返りの位置づけは、50%の達成率を下回り、しかも下降傾向にあった。職員研修会でこの結果を交流し、全教科で取り組もうとせず、まずは主題研究の国語の授業から取り組んでみてはどうか・・・と確認し合った。

●「牧小 指導改善5つの取組」の1(週案への記入)、2(朝学習)、3(教材研究の時間確保)については、2学期確実に取り入れることができたが、2(算数タイム)や4(算数の終末における少人数指導の実施)、5(朝のスピーチ実施)については、全職員で話し合ったとはいえ、年度途中の切り替えは難しく、全学年が取組を実施できたわけではなかった。指導改善サイクルは、PDCAサイクルで常に指導の結果をチェックし、改善を図りながら次の指導に生かすことをねらっているが、年度途中の改善は負担感も大きく、浸透しにくかった。ポイントを絞って全職員が納得して改善していくことが必要である。

・岐阜県や安八町の自然、農産物、歴史等を紹介したり、他県の小学生をもてなす活動を行ったりすることで、郷土を愛する気持ちや相手を思いやる心を育てることを目指す。

(すいせん交流in安八、in越廼での5つのやくそくのふり回りカード、感想文、手紙)  
・自然体験(海水浴、海釣り、磯遊び等)、食事作り、他県の郷土学習を共に行うことで、視野を広げ、異なる地域や人々に親しみをもち、協力し合おうとする気持ちや態度を育むことを目指す。

○すいせん交流を通して、確実に子どもの「他校の子とも仲良くなろう」「積極的に話し、交流を深めよう」という意識は高まった。

○本事業の採択を受けた10月には、長年続いている互いの地を訪問し合うすいせん交流は、実施後であった。しかし、自然条件の異なる福井市立越廼小学校との交流は、小規模校のデメリットの最小化のためには、たいへん有効な活動であると感じている。10月以降、5年生が国語の並行読書で作成した「魅力カード」を送ったり、手紙をやりとりしたり、担任が5年生の国語の授業を視察したり、来年度の修学旅行時にも一部交流したりという新たな試みも生まれてきた。

●負担感が大きくならないよう配慮しながら、来年度すいせん交流in安八、in越廼での確かな成果を明らかにしたい。

・越廼小学校の主題研究授業、研究会を視察し、福井の学力向上の方策を学び参考にすることで、「牧小の授業、これだけは!」「話し方・聴き方の系統的指導」「家庭学習のすすめ」等の指導改善サイクルを見直し、さらなる確かな学力の向上を目指す。(学力確認テスト、学期末テスト、漢字・計算検定全国学力・学習状況調査質問紙抜粋アンケート)

○越廼小5年生は、異学年との交流がしやすいという少人数学級のメリットを生かし、4年生に「4年生へすいせん交流でおすすめ活動を推薦する」という題材を設定し、固定化された人間関係の外に言葉や構成を工夫して話す活動を仕組み、主体的に思考する場がつけられていた。タブレット端末で自分たちのスピーチを録画し、スピーチをふり振り返りながら的確なアドバイスをし合ったり、練習前後のスピーチを比較して成長を確認したりする等、効果的な活用を図っていた。来年度のすいせん交流がより子どもの願いに沿った活動になることが期待できる。

○福井県が昭和26年(1951年)からSASA(福井県学力調査)を行い、その結果をもとに学力向上プランを作成して、結果を授業づくりに活かすため、PDCAサイクルによる取組を長年にわたって継続してみることが分かった。

●福井市では、学校教育方針に「学びの一貫性と確かな接続」を掲げ、目指す子どもの姿の実現に向け、具体的な行動目標を設定し、取組を進めてこられた。そして、数値を用いた指標に基づいて評価をし、目標設定や評価にあたっては、児童生徒・保護者・教職員や地域へのアンケートなどの結果を分析し、課題をより焦点化して取り組んでおられる学校が多いという説明を受けた。本校も、指導改善サイクルを確立し、それぞれの目標の達成率を数値化しているが、その後の課題の焦点化に弱さがある。また、課題が明らかになっても、その指導改善の取組が全教員の行動目標となっているとは言えない。全教員による組織的な指導改善が実現できるようにする必要がある。

・P T Aや地域の方の読み聞かせを継続して行い、読書の楽しさを味わわせ読書意欲を高めることを目指す。(読書量調べ、読書個人カルテ)  
・並行読書の本を確実に準備するためにハートピア安八(公立図書館)と連携し、「読むこと」の単元で単元を貫く言語活動を行い、並行読書を取り入れた単元指導計画を工夫することで、主体的な読書活動に発展させることを目指す。(読書個人カルテ、並行読書で書いた感想文等)

○P T A母親委員会の年2回の読み聞かせは、子どもたちの読書意欲を喚起させるために、たいへん有効である。特に、今年度秋に行われた「くれよんのくろくん」の読み聞かせは、手作りペーパーサートを用いた人形劇のようなものであったため、児童の関心を高めた。また、11月に行った『ひびきあい集会』とも関わらせ、人権について考えられる内容の本を選んでいただいていた。事後「くろくんは最初いじめられていたけど、くろくんのおかげで花火大会ができました。くろくんにはくろくんのいい所があるので、いじめはダメだと思います。」のような感想を述べる子もいた。

○ハートピア安八の出前図書館も子どもたちがより多くの本に親しむ機会となり、今年度の利用は、1学期より2学期の貸し出し冊数や読んだ本の分類数がぐんと増えた。

○本事業の経費で並行読書の本を本校の図書館にも充実させることができた。図書資料の充実により、担任は並行読書させたい本を教室の「読書コーナー」に複数準備して、子どもに奨めることができた。読書環境の充実は、子どもに「読んでみたい!」と読書意欲を喚起させるために、たいへん有効であった。図書利用作文コンクールや読書感想画コンクールへの出品にも、意欲的に取り組む姿が見られた。

●本校の図書館は、残念ながらまだバーコード化されておらず、児童が本を借りるときは、従来のように図書カードに毎回記入をしなければならない。また、毎学期、一人一人の読書冊数や分類調べ等を行っているが、その集計には手間がかかっている。牧小のほとんどの児童は、読書好きではあるが、本より外遊びを優先したい子、また高学年になると、昼休みなど委員会活動があって図書館に行けない子等もいる。より手軽に本を手に取り、読書を楽しめるよう、P T Aの協力もお願いしながらバーコード化にも着手していきたい。

## (2) 成果物等

- ・成果刊行物(冊子)  
「自らの考えを豊かに伝え合う子の育成」  
～図書館教育と関わらせた国語科指導～

## (3) 今後の取組予定

- ・並行読書と共に、ビブリオバトルを位置付けた単元指導計画の作成
- ・目的的な読みと精読的な読み、ビブリオバトルの研修
- ・一人一人を見届け、個に応じた指導・援助に役立つ個人カルテの工夫
- ・「牧小の授業、これだけは!」導入と展開の効率化と終末の見届け
- ・指導改善サイクルのAにおける行動目標の明確化と共通理解・共通行動
- ・図書館のバーコード化(P T Aとの連携)
- ・「家読のすすめ」による家庭内読書の推進(P T Aとの連携)